

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
5 3	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
<b>題名 (原題/訳)</b>	
Meta-analysis of studies of alcohol and breast cancer with consideration of the methodological issues. アルコールと乳癌の関係についてのメタアナリシス—方法論を考慮して	
<b>執筆者</b>	
Key J, Hodgson S, Omar RZ, Jensen TK, Thompson SG, Boobis AR, Davies DS, Elliot P.	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b>	
Cancer Causes Control. 2006 Aug;17(6):759-70	
<b>キーワード</b>	
アルコール、乳癌、疫学、メタ解析	
<b>要 旨</b>	
<p><b>目的：</b>            アルコールと女性の乳癌の関係について最新の評価を行い、方法論上のことについてと、これまでに出されていた概観における不足点を扱うことを目的とした。</p> <p><b>方法：</b>            あらゆる言語で書かれた、乳癌初発症とアルコールについての原著論文のメタアナリシスを行った。校閲者 2 人それぞれがデータを抽出した。研究の質については、交絡因子の制御など客観的な基準に基づいて評価された。公表資料のバイアスについては、フネル(漏斗状)プロットにより検討された。また heterogeneity(不均一性)について検討する為に、メタ回帰分析を用いた。飲酒対非飲酒に関連したリスクや、量-反応関係については、無作為効果法を使って評価された。</p> <p><b>結果：</b>            98 の研究が対象になり、対象者として 75,728 人の飲酒者と、60,653 人の非飲酒者が含まれ、それぞれ量-反応関係についての分析が行われていた。これらの研究から得られた所見は、この研究で意図したメタアナリシスにおける研究デザイン及び分析方法を研究するという点について十分なものであった。適切な交絡因子を制御していた、高い質を持つ研究では、飲酒による過剰リスクは 22% (95%信頼区間 (95%CI) : 9-37%) であった。一日当り 10g エタノール摂取が増すごとに、リスクは 10%(95%CI : 5-15%)増加した。公表資料のバイアスの存在については明らかな証拠はみられなかった。アルコール飲料の種類や、閉経の時期によって、リスクに有意な差は見られなかった。人口寄与危険度は、米国では 1.6%、英国では 6.0%であった。</p> <p><b>結論：</b>            研究ベース及び方法論的問題点を考慮に入れた上で、筆者らはアルコールと乳癌との関連を確認した。このメタアナリシスの結果を、個々のデータ分析結果と比べたが、結果は同じであった。よって、アルコールと乳がんの間には因果関係があると筆者らは結論付けている。</p>	